筑波大学教育学会・日本教育学会関東地区研究グループ合同企画
公開シンポジウム報告

子どもの希望・教師の希望・学校の希望
―教育学と希望学の接点から―

オーガナイザー　　田　中　統　治※

第９回大会の公開シンポジウムを企画するに当たり，日本教育学会の関東地区研究活動（担当理事：田中統治，大髙泉，門脇厚司，清水一彦会員）と合同で行ったことを報告する。この間の経緯を説明すれば，平成21年９月に日本教育学会の関東地区研究活動を企画するように事務局より依頼され，「教育学と希望学のコラボレーション」と題して申請したところ，日本教育学会の理事会の承認を得られた。

そこで，希望学プロジェクト長の東京大学社会科学研究所の玄田有史教授を招聘して日本教育学会関東地区会員向けのシンポジウムを計画した。その際，時期的にもまた会場手配等の面からも当学会と合同で行えれば都合がよいと考え，研究部長の水本徳明会員に相談の上，合同開催の企画を依頼した。

このため，第９回大会の公開シンポジウムには日本教育学会関東地区会員にも案内をし，広く参加を呼びかけた。会場校の筑波大学附属小学校会員のご協力により，公開シンポジウム「子どもの希望・教師の希望・学校の希望―教育学と希望学の接点から―」では活発な議論が展開された。以下，シンポジウムの発表順に報告するが，玄田教授と阪本教諭の発表内容については田中が代理でまとめている。

教育学と希望学のコラボレーション　―関東地区の教育要求をめぐって―

田　中　統　治

教育学の役割の一つとして期待されていることに，次世代育成に向けた大きな見取り図を描くことが挙げられる。近年，そうしたマクロな社会構想やデザインと関連した教育学者からの提案はあまり見られなくなった。その点で，希望学の提案は，教育学にとっても示唆する点が多い。首都圏にある関東地区では，その

※筑波大学大学院人間総合科学研究科

都市化の様相によって，地域住民，保護者，そして子どもたちが抱えもつ「教育要求」に質的な変化が生じており，希望学のような大きな視点から，教育学の問題意識と理論を鍛錬することが必要である。

本シンポジウムでは，希望学の研究者を招き，実践的なコラボレーションを活発化するための視点を明確にできた。私たちが教育格差の問題に取り組む場合，階層研究やキャリア教育研究等の視点のみでは一定の限界に直面する。ひとはどのように失望し，そこからどう立ち上がるか，失敗から学ぶ仕掛けをどう設ければよいのかといった実践的な問いへの答えが必ずしも見出せないからである。

この問いについて希望学の示唆によれば，「ゆるやかな期待とつながり」が「何とかなるさ」という「根拠のない展望」を生み出すきっかけとして重要である。希望は紡がれる物語性を帯びていて，それは生徒本人が感じるものである。この視点を高校生の進路希望の実現や進路指導に応用するために，教育（学）者は何に取り組めばよいだろうか。

この課題は，生徒を上手に失敗させること，彼らのために関係を生む居場所と止り木を用意すること，つらく無駄に思えるものに意味があって現に何とかなった体験を積むこと，閉じていない別の世界と対話の回路を開くことなどではないのか。教育学と希望学のコラボレーションは，私たちのこうした切実な関心がスパークするところから立ち上がる。それは，地域に潜在化している教育要求を見通すため教育学に必要な視点である。

希望学は「野蛮で真剣な遊び」であるという。そうしたチャレンジするプロジェクトから学びたいし，専門分化しすぎた既存の研究分野をブレークスルーする上での方法論として注目される。希望学が釜石市をフィールドとしたケーススタディから，同窓会のもつネットワークを指摘した点も興味深い。

今後，取り組むべき課題の第一は，教育学と希望学によるフィールドワークとアクションリサーチである。シャッター街に象徴されるように，中小都市の中には次第に活力を失いつつある地域が見られる。これに危機感をもって市町村単位に行政主導の形で「教育による町おこし」の試みがなされつつある。住民の間でも危機感を覚えるグループによる活動が起こりつつある。「孤立・無縁社会」に陥らないために，教育学の立場から具体的で根拠をもった提案が求められている。

第二は教師の希望学という視点である。学生の間で教育関係の仕事を志望するけれども，「教師になりたいとは思わない」との声が聞かれる。理由には，教職を

取り巻く環境が厳しくなったこともあるが，日本の若者が教職に魅力と希望を感じていない面がある。それは，学生たちが接してきた教師たちの姿から感じ取ったものではないかと危惧する。次世代を希望と出会わせる力がいま求められる教師の力である。

教師の力の深層部には，希望という漠としたアイデンティティの核がある。その芯は失敗や挫折から「何とか立ち直った」経験知ではないか。職場での孤立や個人主義がもたらす負の作用は指摘されるが，それを乗り切った経験がもたらす希望は語られない。「人生まんざらそう捨てたものではないよ。」子どもは教師の姿からこのメッセージを受け取っている。そこに教師研究が希望学から学べる点がある。

第三の課題は，教育は子どもたちの希望をどう紡ぐことができるか，そのメカニズム解明の問題である。教育は希望をどう生み出せるか，失望からどう立ち上がる契機となれるのか。これまで生きる力やキャリア教育の必要性は強調されてきたけれども，その形成メカニズムにまで迫る実証的・実践的な視点が乏しい。緩やかなネットワークや居場所づくりに関して，教育学は社会科学との連携を強めて実践的な提案を行う必要がある。

筆者は教育学を社会科学の一ジャンルに位置づけ，身近で切実なテーマを追究する方向に研究の可能性を展望している。今回，異分野（労働経済学）の研究者と志を通じ合わせるコラボレーションは爽快な体験であった。希望学プロジェクトは終了したが，希望は終わらない。かつて希望は社会の前提であった。「生きるのにしんどい」子どもたちと接してみれば，希望が日本社会の前提ではなくなったことを感じる。若者が上手に失敗して，自分なりにそれを受け止め，次につなげていくところに，成長のストーリーが組みあがる。私たちは実態以上に悲観的になっている面もある。教育に携わる者としては，リアリストでありながら希望にこだわりを持ち続けることの意味について，異分野と提携しつつ社会の見取り図を積極的に描くことが求められる。

高等学校におけるキャリア教育の取り組み
―筑波大学附属坂戸高等学校の事例から―

阪　本　康　之※

子どもたちと接していて，「希望，以前はあったが，今は失われている」状況を実感している。成果主義やリストラによる不安定さが，子どもたちに親の世代とは時代が違うことを示している。これから何をどうすればよいのかという迷いや諦めの実態が見られるようである。教師として何をしてやれるかを考えるための材料として，藤原和博氏の講演会「よのなか net より」から示唆を得たので少し紹介したい。それは，20世紀と21世紀の社会のタイプを対比し，求められる能力の違いを指摘している。

20世紀：成長社会「みんな一緒」，情報処理力「おぼえる力」を小・中・高で育成する。

21世紀：成熟社会「それぞれ一人一人」，コミュニケーション不全症候群，既に正解は知られている　ならば　話す必要はない，情報編集力「つなげる力」を高・大で育成する。自分の意見を出して，人の意見を聞いて，修正していく，コミュニケーション力が求められる。

これと関連するが，総合学科が設置される契機となった第14期中央教育審議会答申『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について』（平成３年４月）の「第３章　改革の視点」中，「⑴高校教育改革の視点」として，「ア　量的拡大から質的充実へ」「イ　形式的平等から実質的平等へ」「ウ　偏差値偏重から個性尊重・人間性重視へ」の方針が示され，「普通科と職業学科とを統合するような新たな学科を設置することが適当と考えられる」旨が提言された。

沿革と概要からわかるように，本校はこれを「希望」として，平成６年に全国初の総合学科，「総合科学科」を開設し，15年度には８から４系列に再編して現在に至っている。11年度の進路結果と21年度を比較すれば，大学への進学者が31名から88名（ＡＯ自己推薦・推薦・指定校，約８割が12月までに決定，一般入試は５名）と約３倍に達している。これに対して，専門学校の場合が72名から31名へ，また就職者も17名から９名に半減している。ＡＯ入試等には反対意見もある

※筑波大学附属坂戸高等学校

が，高校時代に成功体験や熱中体験をもつことが生徒に目的意識を育てる上では必要なことである。私は生徒たちに「さかなクン」を目指せと言っている。

本校の方針は，多様な教科・科目を生かした進学校，「大学で何を学ぶか」を学ぶ進学校である。「新しい進学の形」を示しながら，生徒の希望を育てようとしている。例えば，進路指導部がバックアップするキャリア教育としての「産業社会と人間」（１年次・産社）では，熱中している（いた）ことを核に，自己を知り，将来（40歳ぐらいに）何をしていたいか，どういう仕事をしたいか，その職業につくための資格の要不要，進路はどうすればよいかについて指導している。２年次に，教科「産業」，「産業理解」，「起業基礎」（８能力を育てる），進路研究（資格取得）などに取り組み，努力すればできることを強調している。

また，アカデメイア（土曜特別講座）は，補習ではなく，ゼミ形式で「考え方を学ぶ」講座とし，自分の視点から意見が言える生徒の育成を目指している。最終段階の「卒業研究」では，自己学習力の育成に向けて，「研究の成果」よりも，「研究のプロセス」を重視して，「何が分かったか」よりも「研究にどれだけの時間と情熱を費やしたか」，問題解決能力や表現力（プレゼンテーション・コミュニケーション能力）を総合的に評価している。私が指導した生徒のプレゼンテーション（「微小突起群のゴーグルへの応用および風洞実験での検証」：筑波大で実験）がその成果の一例である。

生徒に希望を抱かせる上では，授業を計画的に活用できる「自律した学習者」を育てることが重要である。本校は卒業研究を最終目標にこれを実践してきた。今後，国際的視野を持って研究を行う生徒に対し，海外への渡航費を援助することでその研究をより充実することができるよう支援している。このプログラムに対して，生徒の渡航費・引率教員の渡航費・引率教員の滞在費として計50万円の経費が筑波大学附属学校教育局から認められた。昨年は「フィリピンの魅力～異文化共存のために～」を，今年は中国「アルカリグラス栽培の節水技術開発～土団子による栽培実験～」やタイ（２年次）を計画し，外国にも目を向けている。

（文責：田中統治）

希望学からの提案　―ジタバタしていいんだよ―

玄　田　有　史※

私が現在つとめている東京大学社会科学研究所では，2005年から希望学という新しい学問に取り組んできた。希望学では，希望を持てる人と，そうでない人の違いを生む背景を，アンケート調査や地域研究など，さまざまな角度から研究してきた。その中の発見の一つは，「あまりに目先の損得勘定ばかりに気をとられすぎると，将来の希望も失ってしまいがちになる」ということだった。希望は叶(かな)えることだけに意味があるのではない。希望は出会うことにこそ意味がある。そんな自分自身にとっての本当の希望との出会いは，不器用でもいいから，ジタバタを続ける日々のなかでこそ生まれるものなのである。損得勘定でなく，寄り道や挫折経験が希望との出会いを生む。

このプロジェクトを思い立った当初，希望という曖昧な概念について，定義を試みた。‘Hope is a wish for something to come true by action.’このうちどれかが足りないのではないかと考えた。それは，wish（想い・気持ち），something（自分なりの何か新しいこと），come true（叶えるための手立て・道筋），それとも，action（行動）なのか。希望をもつとは「よい明日を創りたい」と求めていくことである。それは，資格のようなものではなく，「石の上にも三年」と我慢して何とか潜り抜けた経験，つまり挫折経験と関係している。就職しても５年以内に辞めてしまう若者が多い背景には，少子化によって失敗させないこともあるだろう。調査結果からみれば，約８割の若者が失敗を何とかクリアできているが，２割は「引きずっている」ようである。

数年前，作家の村上龍さんと島根県民会館で対談をしたことがある。対談の中で村上龍さんが「頑張る」についてお話されたことを憶えている。頑張るという言葉，最近，評判がよろしくない。心の病で苦しんでいる人たちにもっと頑張れと励ますことは，さらに追い込んでしまうことになる。だからできるだけ言わないほうがいいのだと。ところが村上さん，「頑張れ」は必ずしも悪い言葉ではない，使い方さえ間違えなければいいのだと言われた。今何かをしていて，それをやり続けることがその人にとって最も大切なとき，頑張れという言葉は，元気を

※東京大学社会科学研究所

与えてくれるのだという。

確かにマラソンで一位を独走している選手にとってみれば，沿道からの「頑張れ！」は，大きな励ましになる。自己新記録を更新し続けている選手にとっても，観客席からの頑張れの声援は，自分を奮い立たせる追い風になる。頑張れという言葉に励まされる人，つまり，やるべきことがはっきりしている人は幸せな人である。

ただし，みんなが頑張れに励まされるわけではないこともまた事実だ。本当はやりたくないことを，やり続けなければならない人も多い。自分が本当は何をやりたいのか，わからなくて苦しい人もいる。さまざまな理由で，何かをするという歩みを止めてしまった人だっている。そんな人たちの心に，頑張れという応援の言葉は響かない。

頑張れないとき，大事なことは何だろう。それは「ジタバタする」ことである。成功の見通しや確実な勝算が持てなかったとしても，あきらめない。迷いながらも，とにかく今できることに取り組んでみる。それがジタバタするということである。ジタバタするだけでは意味がないという冷静な意見もあるだろう。ムダなことはやめて，結果につながることだけを戦略を練って実行するべきだ，と。戦略は頑張れる目標を持っている人にとっては，良いだろう。けれど，目標が見つかってない人に，戦略は無意味だ。むしろ自分ができる範囲でよいから，とにかくジタバタしウロウロしてみる。すると，ひょんなことから思いがけず希望のチャンスやヒントは見つかるものだ。あえて持とうとするものが希望である。半分くらいは「損してもよい」と考えるタイプの方が希望と出会えている。そこに，ストーリーや物語性が必ず浮かび上がってくる。希望は叶えることが大事だが，それを育み，成長させていくことに注目したい。この点で，キャリア教育は，人生全体の視野から捉え直す必要があるのかもしれない。その可能性をリアリストの視点で探りたい。実態以上に悲観論に陥ることは避けよう。最後に言っていることだが，全国185カ所に「総合労働相談」コーナーやスポットがあるので，不当な労働問題で困ったときには泣き寝入りせず，相談しなさいと生徒さんに伝えてほしい。

（文責：田中統治）

以上が，田中が代理でまとめた内容である。より詳しくは，玄田有史『希望のつくり方』（岩波新書，2010年）を参照されたい。

討議の概要

水　本　徳　明※

３名のシンポジストの報告の後，藤田晃之会員（国立教育政策研究所）のコメントを受けて，活発な討議が展開された。いくつかの論点に整理してその概要を述べる。

１．希望とは何か

第一に希望を持つことと迷うことの関係が議論された。経験の乏しい中での自分探しは難しいのではないかという藤田会員のコメントに対して，玄田氏からは，迷うことの大切さと分からないことから逃げないタフネスの大切さが指摘された。討議の中で，具体的にはハローワークや厚生労働省の総合労働相談コーナーに関する知識など，「迷うスキル」の重要性が確認された。附属坂戸高等学校の「起業家教育」でも，生徒たちが迷いながら取り組んでいることが報告された。

第二は，希望と運やツキの関係である。田中会員から日本では，運やツキで人生が変わると信じている子どもが多いことが指摘された。玄田氏からは，運がよかったと思える人は何かしら努力している人であり，何でも自分でやろうとするのではなく人に任せたり，頼ったりできることが大切だという指摘があった。

第三は，希望と他者，より広くは社会のリアリティとの接点である。玄田氏が示した“Hope is a wish for something to come true by action.”を受けて，社会的なリアリティの中で希望を位置づけることの重要性が確認された。門脇会員からは，筑波学院大学での実践を踏まえて，Hope の定義に with others を付け加えるべきとの提案があった。玄田氏からは，人との関わりをもつことが困難になっている現状の問題点，分からないからこそ分かりたいというところを出発点とするコミュニケーションの大切さが指摘され，分からないから分かりたいということが希望であるという見解が示された。

第四は，時間軸における希望の位置である。討議全体を通して，希望にとっての体験（失敗体験も含めて）の重要性が強調されたが，玄田氏は体験を振り返ることの大切さを指摘し，希望は過去・現在・未来をつなぐアンカーのようなもの

※筑波大学大学院人間総合科学研究科

であると述べた。

2．学校教育に何ができるか

第一にキャリア教育の可能性について議論があった。ここ10年ほどでキャリア教育も変化してきているという藤田会員のコメントに対して，田中会員からは効き目のあるカリキュラムには必ず副作用があり，万人に効く薬はないという視点がキャリア教育にも必要ではないかという問題提起があった。阪本氏からは，自分の好きなことが分からない生徒が多い中で，自分探しをするのは大変ではあるが，一歩を踏み出すために好きなことをやってみよう，その中でだんだんやりたいことが分かってくるのでいいのではないかという見解が述べられた。

第二に，教育は子どもたちに希望を与えられるかという論点である。玄田氏はこれには懐疑的であり，希望を与えることは難しいけれど，絶望を避けるためにできることをしなければならないと述べた。また，子どもたちが心の中に持っている希望やその原点になっている経験に気づくチャンスを教師や親という周りの人がつくることが大事で，希望と出会うために異文化体験や体験学習がチャンスとなればよい，またそのために学校は社会にもっと協力を求めるべきであることが述べられた。阪本氏からは，コミュニケーションの中で子どもたちの中にあるものに気づかせてあげるのが教育ではないかとの指摘があった。

第三は，教師の問題である。田中会員は外国では教師があこがれの職業となっているけれども，日本ではそうではないこと，また，教師の姿そのものがキャリア教育であり，子どもたちにメッセージを発していることを指摘した。手打会員からも教師が子どもたちを絶望から救うことがなかなかできていないとするなら，教員養成，教育学には何が必要なのかという問題提起があった。

3．希望学と教育学

手打会員の問題提起を受けて，希望学が硬直した教育学の視点を和らげる（田中会員），教育実習における体育祭，文化祭への参加の中での action によって子どもとの関わりが生まれる（阪本氏），教育学は希望を持つためのスキルを考えることができるのではないか（玄田氏），とのコメントがあった。

最後に玄田氏は希望を持つためのスキルには次の３つの重要なファクターがあることを指摘して，３つの「カン」を一つずつ階段を上がっていくイメージで習

得していくのがよいのではないかと述べた。

①知識

②知恵　～キャリア教育で育てようとしているもの

③カン　「感」（感じる）　小

「勘」（勘どころ）　中

「観」（ビジョン）　高